

鳥学ニュース

No. 15

1984年12月1日

三重大会終る

9月末、三重県の津は少し汗ばむほどの陽気でした。この地の三重県教育文化会館で、9月29、30の両日、会員多数が参集して1984年度大会が催されました。鳥学会の会員数はなぜか本州中部以北の東北日本に多く、南西日本には少ないようです。そのためか、大会が南西日本で開かれるのは今回が初めてということでした。この大会の準備は関西地区の会員の協議によって進められ、地元三重県の会員のかたからは実行にあたり特別のお骨折りをいただきました。



一般講演36題、ポスター発表12題。近年、いろいろな手法を用いて、生物学的課題に意欲的に取り組む傾向が強くなってきています。もはや鳥学は生物学の他の分野と切り離されてはありえず、流れは変わりつつあります。これは世界的な潮流です。シンポジウムは「これからの日本の鳥学」と題し活発に議論されました。会員へのアンケート調査を集約して、鳥学研究の現状が紹介され、アマチュアの立場と意見、若手研究者からの発言、プロ研究者の認識と意見などが出されました。この議論のなかで、日本鳥学会の役割や改善が望まれる点も指摘されました。これらは、今後の学会運営にかされるはずで、日本の鳥学研究の発展は基本的にはプロ研究者の活動にかかっています。個々人が力量を高め研究活動に集中的努力をすべきことは言うまでもありません。しかし、同時に研究体制の拡充など制度面の改善も、特に日本の場合、必要です。研究者層を厚くし、各地のアマチュアと共同して日本の自然史をより深く理解する——このために環境庁に要望することになり、総会で決議されました（9頁に掲載）。

懇親会は盛況でした。エクスカージョンはまず礪原温泉へ。湯につかって疲れを取り、翌10月1日の朝、バスで松阪の櫛田川河口に行き、シギ・チドリ類やサギ類、カワウ、ミサゴを観察しました。さらに特別コースとして伊勢神宮の宮域林を見学しました。

短期間に多くの人と話す機会を持ち、多くを学び、刺激を受け、かけがえのない体験をしました。これは、言うまでもなく、大会の準備と実行にかかわったかたがたの苦労と努力の量に比例します。どうもありがとうございました。

来年度の大会は長野の信州大学で開催される予定です。多数の参集で大会を盛りあげ、多くの収穫をあげましよう。
(長谷川 博)

調査・観察の小道具集 (1)

野外で鳥類の調査・研究を行なうのには、大胆でありかつ綿密な研究計画を立案・作成することが何よりも重要である。ひとむかし前までは、こうした研究に特別な機械や器具は必要でなく、双眼鏡に鉛筆、野帳さえあれば足りると信じられていた。これは、製造販売されている科学研究用機器のほとんどが室内利用を前提とし、野外調査用のものがあつたとしても、ものすごく高価で買うことができない代物であつたからである。

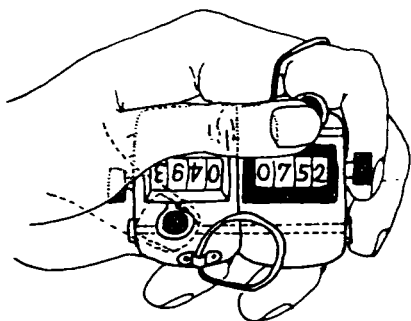
こんな状況で、私たちは経験にもとづいてさまざまな工夫をしてきた。まず、小道具の作成や双眼鏡の利用体験などを紹介してもらうことにした。なかには“コロンブスの卵”のようなものもあるだろう。今後も何回か特集したい。貴重な体験を寄せてほしい。

1. 便利な二連カウンター

呉地正行

鳥の羽数調査の際にカウンターは必需品だが、1個では不便を感じるがよくある。私たちは二連カウンターを使っている。便利なので紹介したいと思う。

これは、市販品を図のように2個結合させたもので、長いボルトを使って固定する。一方のカウンターに印をつけ、各々を区別できるようにしてある。この二連カウンターは種々な利用ができる。例えば、ガン・カモ類のように多種からなる群集の種構成を調べるとき、これを用いれば一度に2種を数えることができる。また、少し慣れると片手で4個、両手で8個を扱えるので、カウンター1個を



(図の説明) 二連カウンター

ボルトとナットで2個を固定する。リセットのつまみが2個とも外側にくるようにする。片方にマジックかテープで印をつけ区別できるようにしておく。

使う場合の $\frac{1}{2}$ の時間で羽数を調べられる。

短時間に羽数を調査できるので、カウント中の鳥の移動(群全体が飛び立ってしまうことなど)による誤差を少なくし、労力を省ける。これ以外にも、成鳥と幼鳥、雄と雌、などを同時に調べることができ、さらに大きな群れで隣に出入りする鳥の数を調べる時、一方を1羽単位、他方を10羽あるいは100羽単位に使うことができる。

2. 巣のぞき鏡

(まとめ 長谷川博)

低く細い木にかけられた皿状の巣が眼の高さよりも上にある場合とか、巣の周囲をあらささないでそっと巣のなかを観察したい場合、のぞき鏡を用いると便利である。これは棒の先に小形のとつ面鏡を取りつけたもので、これを巣の上にかざせば卵や雛の状態がうつし出され、苦もなく観察できる。自動車用のバックミラーを利用するのが簡便(実例は、山岸哲、1981、「モズの嫁入り」大日本図書、26-28頁を参照)。釣り棒を用いれば長さの調節ができる。

キツキ類の巣穴や、樹洞に営巣する種の巣、またドーム型の巣のなかをのぞくのに便利なのは柄付鏡である。歯医者にやっかいになった人ならすぐに思い浮ぶはず。ただし、鏡を棒の先に固定するのではなく、太い針金など折り曲げ可能なものを柄とするのがみそ。巣孔の状況に応じて形をかえる。照明の

ために豆電球(2.5 VAあれば十分)をも取付ける。鏡がガラス屋に行っていたのめば小さく切ってくれる(石田 健)。

カワセミやオオミズナギドリなどの深い巣穴をのぞくにはファイバー・スコープが威力を発揮するはず(胃カメラをのんだ人ならすぐに思いつくはず)。古代墳墓の石室内部や文化財のふすまの内側(貼ってある紙)を調査するのにも用いられた。内部がテレビにあざやかにうつし出されたのをみて驚いた人も多いと思う。実際にはファイバー・スコープの先のほうに車をとりにつけ進入を容易にし、また方向を変えられるようにしなければならない。利用可能性は大だが値段も相当はるはず(調べてない)。

〔参考書〕 Campbell, B. & Ferguson-Lees, J. 1972. A Field Guide to Birds' Nests. 7+546pp. Constable, London. 特にpp.22-23. Hutson, H. P. W. (ed.) 1956. The Ornithologists' Guide. 20+287pp. B. O. U., London. 特に pp.167-168.

3. ペースメーカー機能付腕時計

石田 健

鳥の行動観察で単位時間ごとに記録する必要がある場合、ペースメーカー機能付腕時計と小形テープレコーダーを用いると便利である。1分間に1~239回「ピッ」と音を発する腕時計が売られている(たとえばシチズン製)。これらを用いると鳥から眼を離さずに追跡観察することができる。ただし、腕時計のボタンは小さいので、たとえば寒い時に手袋などしていると操作しにくく、ペースメーカーを始動させにくい。このような場合、スイッチ・ボタンの部分にダイモテープとプラスチックテープでカバーを付けて押しやすくするとよい。また、声で鳥の行動を記録する時、音声起動機能をもったテープレコーダーを用いるのもよい。これは、録音状態にしておくと、音声の入力があった時だけテープが走行しはじめ録音されるというものである。

観察中テープレコーダー操作の手があき、後でテープ起しをするのが楽だという利点がある。ただ、確実に作動させるためには、しゃべり方やマイクの位置、音量調節に多少のこつが要る。あらかじめ十分に試験しておくこと。

双 眼 鏡

1. 双眼鏡の使い分け

樋口 広 芳

私は2台の双眼鏡を使い分けている。ダハプリズム式の9×30は、主にセンサスの時やハイキング気分で鳥を見る時に使っている。これは、なんといっても小さくて軽く、持っただけでもほとんど苦にならない。個体識別用の色足環をつけた鳥を観察する時には、ポロプリズム式の7×50を使う、少々重い、色足環の組合せを確認するには最適である。

明るさと解像力が抜群で、暗い林の中で約20m先のカスミ網の目までくっきり見える。

2. 焦点調節不要の双眼鏡

福田 道 雄

手前から無限遠まで、焦点調節をせずに見ることのできる双眼鏡を紹介したい。ニコン製個別線出式双眼鏡トロピカル7×50がそれで、最初に自分の眼と視度調節リングとで焦点合わせをすれば、そのあとほとんどのものをみることができる。この双眼鏡は、視野全体に広がった鳥のカウントとか、動きのある鳥を迅速にカウントしなければならない時に威力を発揮する。また、木々の間をすばやく飛びまわりながら移動する小鳥を観察するのにも都合がよい。最大の難点は重さが1.36kgとずっしり重いことだ。しかし、アダプターを用いて一脚か三脚に固定することができるので、観察者がたえず移動するのでもなければ、記録をとるのに苦勞しない。あまり遠くのものには識別しにくい、視野が広く、明るいので大変便利である。

3. 近距離用双眼鏡

長谷川 政美

双眼鏡はたいていの場合、遠くにあるものを観察するのに用いられる。そのため視準範囲はふつう5m程度から無限遠である。私はここ数年間、青森県熊島でウミネコの生態調査を継続していて、足環番号を読みとって年齢構成を調べたり、個体識別によって社会構造を明らかにすることが重要な課題になっている。肉眼では1~1.5mくらいまではなんとか足環番号を確認できるが、それ以遠(一番多いのは3~4m程度)は困難である。そこで威力を発揮するのがニコンの近距離視準用双眼鏡である。これは1.5~6mの範囲で合焦するように設計されている。ポロプリズム式、8×30、重量約510g、定価66,000円(詳しくは日本光学精機営業部第3販売課に問合せほしい、電話03-214-5311)。

非常に明るく足環番号を読みとるのに重宝している。難点は6m以遠を見れないことである。従って、近距離用・遠距離用2台をぶらさげていかなければならず、とてもわずらわしい。1.5mから無限遠まで焦点が合うようになると大変ありがたいのだが。

4. 防水型双眼鏡

花輪 伸一

私は、防水型双眼鏡(ツェイス社製ダイアリート8×30)を使用している。これを使っていて便利に感じたことがあるので、その経験を紹介したい。

小雨のなかで12時間、定点観察を行なったとき、防水型でない双眼鏡は内部に「くもり」が生じ、使いにくい状態になった。しかしダイアリートは全く「くもり」が出ず、鮮明な像をたのしむことができた。

光学性能とは無関係だが、防水のためゴム張りになっている。そのため衝撃にも強い。一度、乗用車の屋根に置いたまま、うっかり車を走らせてしまい、双眼鏡を砂利道に落し

てしまったが異常はなかった。また、胸にぶらさげていてカメラなど他の器材へぶつけても音が低くキズもつかない。

難点をあげるならば、その第1は焦点を合わせるのに個別調節式なので、敏速に対応することができないということ、ただし、合焦範囲が広いので、ふつうは頻りに調節する必要はない。その第2は高価であること。こわしたり、なくしたりしないかと気になる。

5. 気密防水型双眼鏡

石田 健

昨年、ミノルタ社から0.2気圧気密防水型双眼鏡10×40が発売された。使ってみたところなかなかよいので紹介したい。

これまでの経験から、この双眼鏡はかなり酷しい条件下で用いても支障ないことがわかった。零下30℃に近い気温のときにも内部結露せず、30℃以上の炎天下で海水をしゅっちゅうかぶる状況下で2日間近く用いても大丈夫だった。海水をかぶったあとは真水をかけて洗ってあげればよい。そのうえ、この双眼鏡は中央繰出式なので、すばしこい鳥にも迅速に対応することができる。

雨天の時用いるには大型のプロアーを併用すればよい。プロアーはもともと表面のほこりを風圧で吹きとばすための用品だが、双眼鏡のレンズ面についた雨滴やくもりを吹きとばすのにも使える。最近、ニコンから同型のもの(8×40だが)が発売された。ただし、かなり高価である。

6. 胸ポケットに入る単眼鏡

川内 博

いつ必要になるかわからないのに常時双眼鏡を携帯するわけにはいかない。とくに通常の勤務をしているときはじゃまである。しかし駅のホームやビルの窓から興味ある光景にぶつかることもよくある。そんなときに重宝しているのが「ニコン単眼鏡」で、倍率は6倍、最短距離は3m。大きさは72×47×21mm、

重さは50gとYシャツの胸ポケットに入れてもじゃまにならない(ちょっと厚みがあるが)。6倍といっても単眼のため、さほど大きくは見えないが、シャープになるので、鳥の羽色や巣材の種類など確認ができる。価格も6,700円と安い。カバンに常時入れておくと思わぬときに便利である。

<追記> 前号の「マーキング法の工夫」に入れておくべき参考書を尾崎清明氏(山階鳥研・標識室)から指摘されました。具体例が多数のっているということです。

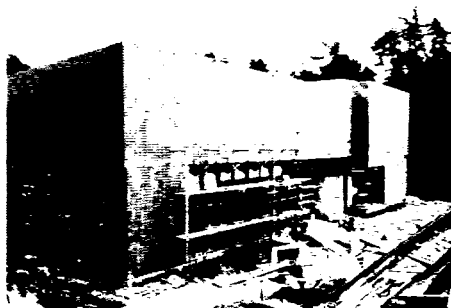
Bub, H. & Oelke, H. 1980. Markierungsmethoden für Vogel. Die Neue Brehm-Bücherei Nr.535. 152pp. A. Ziemsen, Wittenberg Lutherstadt.

Movement

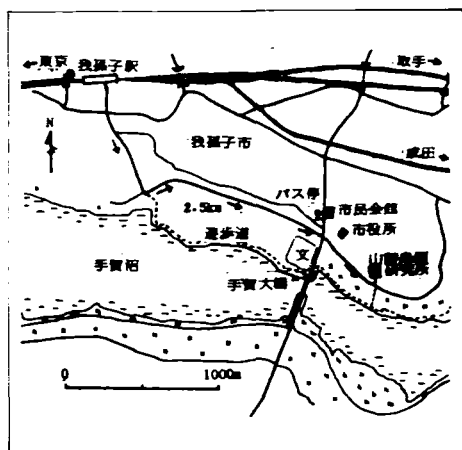
山階鳥類研究所 我孫子に移転

1932年(昭和7年)の春に山階家鳥類標本館として出発した山階鳥類研究所は、今年11月の末、東京渋谷の南平台から千葉県我孫子市の手賀沼畔に移転する。半世紀あまりにわたった「南平台時代」は幕をおろし、新たに「手賀沼時代」が開幕する。(来年1月より開設)

新研究所の住所は：〒270 千葉県我孫子市高野山字堤根 115 Tel.0471(80)1101
 足は、国鉄常磐線・地下鉄千代田線終点我孫子駅下車、そこから徒歩25分(約2.5km)。近くに市役所・市民会館があり、そこまではバスの便を利用できる。駅前からタクシーの利用も可能。研究所は手賀沼の北畔、低い丘のふもとに建つ。(略地図参照)



完成を急ぐ山階鳥類研究所
(1984年10月10日撮影)



研究所の移転にあたって、山階芳麿所長に会見した(紙面の都合でいくらか要約した)。

・半世紀以上にわたった思い出多い渋谷から我孫子に移るにあたって、先生の現在の心境あるいは気持ちはどんなものですか？

— 今の研究所は、陸軍をやめて、鳥の研究をやる場所として造った。当時は庭が広がったから家の玄関と向いあわせに建てた。そして鳥の勉強をした。それから一般に公開して、日本だけでなく世界中の人に利用してもらった。たとえば、コンラート・ローレンツは自叙伝にサイシして送ってきてくれた。このように研究所を世界の多くの研究者から認

めてもらった。だからもう心残りは何もない。

移転は、50年以上たって建物が古くなったこと、それに標本や図書がふえてはいりきれなくなったため。だから、ゆとりのあるところでやったほうがよいと思った。移るという話が出てから、あちこちから来てほしいという誘いがきた。そのなかで我孫子は最初から一所懸命やってくれた。それで非常に信頼がおける気がした。

・先生の自伝とも言える「生涯」¹⁾あるいは「履歴書」²⁾を読むと、戦争の前は鳥学研究ひとすじで、戦後はむしろ鳥類保護に力を注がれた、それも日本国内だけでなくアジア地区を広く、ということがわかります。いろいろのことがあったと思いますが、この方向の転換の背景はどんなことだったのでしょうか？

—ひとつには外国に出やすくなったということ。外国で鳥の保護を熱心にやっているのを見て、日本でもやったほうがよいと思えた。またひとつは、GHQのオースチンが熱心にすすめてくれ、いろいろな外国の関係者をよんで会わせてくれたり、連れていってくれた。それに世の中がだんだん落ち着いてきたということかな。

・鳥学会の若い世代の人に対して望みたいこと、言いたいことがありましたら。

—勉強して広い視野を身につけてほしいということ。そうでないと信用されなくなってしまふから。がんばってほしい。

(1984年10月9日、山階先生の自宅で)

注) 1) 青木営治(編著)、1982、「山階芳麿の生涯」、449+22頁。山階鳥類研究所発行。出版科学総合研究所。(著書・論文総目録も載っている)。

2) 日本経済新聞「私の履歴書・山階芳麿」、29回連載(1979年4月26日-5月25日)(山階鳥類研究所でまとめて小冊子にしてある。「私の履歴書」20巻に収載(1984年7月2日、日本経済新聞社発行)。

(長谷川 博)

第4回鳥類談話会の報告

この会はもともと北海道東部の鳥学会、野鳥の会々員の有志が懇親を主な目的に集まり、そのついでに各人の研究紹介もしているものである。今回は三浦二郎氏のお世話で摩周岳の裏手にある養老牛温泉につかりながらの交流会であった。参加者は29名。各自が持参した「飲用水」のおかげで懇親会は大いに盛りあがった次第である。なお、研究紹介は次のとおりである。

藤巻裕蔵：ポーランド紀行、中川元：流水と鳥(1984年冬のヒメクビワカモメとオジロワシ・オオワシ) 黒沢信道：春国岱より9月15日について考える、小野登志和：ガンとカモの話題2つ、三浦二郎：知床横断道路鳥類センサス3年の調査とその考察、小荷田行

男：根釧原野の自然とその改変、橋本正雄：道東海岸線の鳥獣、芳賀良一：タンチョウの戸籍調査について。

次回は中川元氏(知床博物館)のお世話で網走地方で行われる予定である。

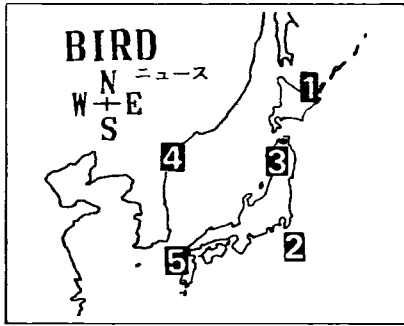
(藤巻裕蔵)

高野伸二氏 逝去

本会の評議員・幹事を長く務められました高野伸二氏が、10月15日 がん性腹炎のため永眠されました。慎しんでご冥福を祈ります。

<年会費をお納めください>

会員 4,000円 維持会員10,000円
納入は郵便振替でお願いします。



1 斜里海岸に ヒメクビワカモメ渡来

1984年1月26日、斜里海岸にヒメクビワカモメがきている、と知床博物館の中川元氏より連絡があった。12時20分から13時30分まで私は斜里川河口で、中川氏はそこから600m離れた海岸で観察した。その日、天候は吹雪模様で、流水は接岸寸前の状態だった。結局、私は67羽、中川氏は32羽を観察した。ヒメクビワカモメは砂浜や流水の上で休み、また、波によって打ち上げられる餌を採っていた。その日、オホーツク沿岸や根室に住む鳥仲間と連絡し、調査を依頼したが、ヒメクビワカモメは斜里市街から知床岬へむけての約40kmの海岸線で観察されたただけであった。

(森 信也)

2 ハンボソミズナギドリ 海岸近くで採餌

伊豆大島では例年5月下旬にハンボソミズナギドリの大群が沖を通過する。しかし、これまでこの鳥の採餌群を見る機会に恵まれなかった。1984年5月29日、大島間伏の砂の浜で、夕方の上潮時に約1000羽が少数のオオミズナギドリとともに採餌しているのが観察され、翌30日の夕方にも約600羽の採餌群がみられた。ハンボソミズナギドリは波打際から100m以内に多数が接近して採餌した。オオミズナギドリは近づかず、ハンボソの外側にいた。今年マイワシの小さな個体が異常に多く、ハンボソはこれを採餌していたようだった。

(望月英夫)

3 青森県菱喰山で クマガラの鳴き声を確認

1984年5月26日に三上正光・中塩一夫・呉地正行が菱喰山(青森県西津軽郡鯉ヶ沢町)に登山した際にクマガラの鳴き声を聞いた。鳴き声はクィーン・クィーン、コロコロコロと聞こえ、ドラミングの音も頻繁にしていた。同地区一帯は天然ブナ林がよく保存されており、クマガラが繁殖している可能性は高いと思われる。

菱喰山へ向う途中の赤石川ではシノリガモ5羽(2番いと雄1羽)も観察された。

(呉地正行)

4 カンムリツクシガモ 再発見の報

ドイツ鳥学会のJournal für Ornithologie第125巻1号(1984年)に、1971年3月末に北朝鮮北部の日本海沿岸で雄2羽雌4羽のカンムリツクシガモが観察されていたことが報じられている。つづいて、過去の採集・観察記録が整理・検討され、カンムリツクシガモの繁殖・越冬分布域が仮想されている。そのなかには日本列島の一部も含まれている。もしカンムリツクシガモが今なお生残しているなら、日本列島のどこかに渡来する可能性がないとは言えないことになる。さてだれがその幸運にめぐりあうか。(長谷川 博)

5 日本初・ヤナギムシクイが福岡市で!

日本ではまだ記録のなかったヤナギムシクイ *Phylloscopus trochiloides* が1981年10月29日、福岡市東区奈多で、ガラスに衝突して死んでいたことが、最近になって判明した。これは今年の10月27日の鳥学会例会時に山階鳥研の吉井・茂田氏によって発表されたもので、それによるとその個体にはソ連のリングが装着されていて、No.を照会したところ、同年9月15日、カムチャッカで放鳥されたものであることが、このほど連絡されてきたとのことであった。

● 黄胸オナガガモを

見つけてください

東京都台東区不忍池で、オナガガモのオスの頸から胸の白い羽を、黄色に染色標識して放鳥しています。目撃された方は、場所・年月日・羽数をお知らせください。

〒110 台東区上野公園9-83

上野動物園飼育課 福田道雄

● 竹に穴をあける

キツツキの情報を

今年の大会のエキスカージンで行った、神原温泉で、アカゲラが竹に穴をあけているのを観察しました。キツツキ類の同様の記録をお持ちの方、お教えください。

〒113 文京区弥生1-1-1

東京大学農学部森林動物学教室 石田 健

● クロトキの生息記録の

収集に協力を!

コサギの冬罫でクロトキを発見したのがきっかけとなり、日本列島でのクロトキの生息記録の集計をはじめました。これまでに72例(約126羽, 1874-1983年)を集めました。

本誌第13号で地方鳥類誌が特集され、都道府県別の目録が載りました。それらのなかには私がまだ入手していない記録も取められているにちがいないと思います。しかし、それらすべてに、いま、私が目を通すことは不可能です。お持ちの鳥類誌にクロトキの生息記録がのっているのに気づかれたなら、連絡して下さい(コピーあるいは筆写で)。また、未発表の記録があれば、発見年月日、場所、羽数、成・幼鳥の区別、環境、滞在期間などを御教示下さい。

〒535 大阪市旭区新森2-24-20

伊藤病院内 伊藤信義

● 都市の鳥を調べてみませんか——— 都市鳥研究会からのお誘い

コンクリートとアスファルトと鉄を基調とした都市という環境は、日本にかぎらず世界中で増大しています。緑や土や水といった自然の乏しいこの環境は、生物にとって決してすみやすいところとは思えませんが、結構その姿を街の中で見かけます。とくに鳥類は目立ち、その生態を追ってみると、何種類かの鳥についてはこの人為的な環境をうまく利用している実態が浮かび上がってきます。東京周辺でいえば、キジバト・ヒヨドリ・ハシブトガラスなど10数種類の鳥たちで、これらは食物や営巣場所、罫、休息場所など生活の基本的な部分を人間社会に依存し、都市環境に適応して生活していると思われまます。

われわれはこれらを都市鳥(としちょう)と呼んで、新しいタイプの鳥としてその生態を調べています(その成果の一端は、月刊誌「遺伝」の1983年8月号に特集として掲載されていますのでご参照ください)。

今年からは顧問に黒田長久先生を戴き、東京駅周辺をベースに、より活発な活動に入っていますが、それとともに全国的な研究へと組織を広げることになりました。街に生活する人はますます多くなっている昨今、都市に生きる鳥に目を向けている人も多いと思います。そこで都市鳥研では協同研究者を募っています。興味ある方は下記へご連絡ください。資料をお送りします。

(川内 博)

〒351-01 埼玉県和光市本町31-16-901 都市鳥研究会

◀ 1984年度大会の記念写真を頒布します ▶

表紙の写真(実際にはフジカラー、サイズHGR)をおわけします。切手120円分(1枚)を同封して、下記に申込んで下さい。

〒274 船橋市三山2-2-1 東邦大学理学部生物学教室 長谷川 博

日本鳥学会の会誌の正式名称は「鳥」(会則4条)で、外国に向けてはToriと表記されています。しかし、これだけでは、ほとんどの人に内容を理解されないため、少し小さな字で「日本鳥学会誌」、またBulletin of the Ornithological Society of Japanと補われています。

9月28日の評議員会で、山岸哲氏(大阪市大理学部)から、会誌名を学術雑誌にふさわしい名称にすることを旨とする会誌名称変更の提案がなされました。その理由は、1)現在の会誌名「鳥」は、鳥関係者以外の生物学関係者に学術雑誌としてほとんど認識されていず、2)諸外国の鳥学・生物学研究者にもToriは理解されにくい。そのため、3)研究職の人事(採用・昇任など)で、「鳥」に発表された論文が研究業績(学術論文)として正しく評価されない場合がある。4)その不利益を考慮してか、若い研究者のなかには、自分の研究成果を「鳥」に発表するのをためらい、他の学術雑誌に投稿する人がふえてきている。5)鳥学会の発展のためには会誌を充実させることが何よりも重要であり、その意味から、少なくとも会誌名を学術雑誌だと素直に理解されるように変更する必要があるのではないか、というものでした。

これに対して賛否両論があり、たとえば、「鳥」は歴史ある会誌名であり、変更は好ましくないという消極的意見、あるいは、誌名変更で認識があらためられることはなく、むしろ内容の充実こそ重要な問題だ、と指摘する意見も出されました。しかし、具体例として「日本鳥学会誌」というように、変更には積極的な意見が多く述べられました。

ただ、会誌名称の変更は会則の変更を必要とする重要な事項(総会での議決による)であるため、早急に結論を出すのをひかえ、検討委員会をつくって、他学会の会誌名を参考にしながら、じっくりと検討することになりました。

これについては、広く会員の意見を集中することも必要です。意見・提案のあるかたは理由を示して、学会事務局あてお送り下さい。

(評議員会での議論をまとめました。)

文責：長谷川 博)

昭和59年9月30日
日本鳥学会会頭
黒田長久

環境庁長官 殿

要 望 書

昨今、所得の向上、余暇時間の増加に伴って、国民の自然環境の保全、特に野生鳥類の保護に強い関心が寄せられておりますが、貴庁におかれましては、日頃、わが国の野生鳥獣の保護、管理行政に尽力されておられることを当学会として高く評価しております。

しかるに、その鳥獣保護行政の基礎となるべき調査、研究資料を収集する機関は皆無であります。もとより、この種の行政は、科学的な調査、研究資料に基づいて行われるべき性格のもので、この意味から貴庁に早急に調査、研究機関を新設していただくべく、日本鳥学会1984年度三重大会において決議しました。よってその実現を強く要望するものであります。

以 上

■■■■■■■■■■ 編者からの手紙 ■■■■■■■■■■

この「鳥学ニュース」を会員の交流の場にとしようと計画しています。情報・資料収集への協力依頼、図書や文献の探索と交換、各地のニュース、意見などお寄せ下さい。

また、鳥学に関するちょっとした質問、日頃の調査・観察でこままっていることの相談などをも寄せて下さい。専門家(エキスパート)による回答や相談する適任の人の紹介など、できるかぎり努力します。さらに、この「ニュース」でとりあげるべきテーマを指摘して下さい。

本欄利用について

このコーナーは会員の方が自由に使っていただくためのものです。責任は一切投稿者で負ってください。原稿の送り先はニュース編集部へお願いします。

過去数年来の懸案であった編集態勢の強化が三重大会の前に決まり、編集の新しい手順は次のようになった。なお、編集幹事は森岡弘之・樋口広芳の2名、編集委員は中村登流・正富宏之・藤巻裕蔵・山岸哲・松岡茂・中村浩志・Mark Brazil（英文担当）の7名である。

- 著者： 原稿（正副2通；英文の場合は正副3通）を樋口広芳（〒113 東京都文京区弥生1-1-1 東京大学農学部森林動物学教室）宛に送る。なお、学会は原稿の取り扱いに十分注意するが、紛失の責任は一切負わないので、著者は必ずコピーを1部手許に残すこと。
- 樋口： ①原稿を受付け、著者に受取り状を出す、②原稿受付票を記入する、③原稿を点検し、気のついた点について意見を書き、校閲者となる編集委員を推せんし、④森岡に原稿を送る。
- 森岡： ①原稿を点検し、気づいた点について意見を書き、②樋口の推せんに基いて校閲者を決め（校閲者は編集委員以外の者になることもある）、③原稿を校閲者に送る。
- 編集委員：①校閲者となった編集委員はよく原稿を点検し、その内容が出版するに値しないと考えられる場合はその理由を書き、直ちに森岡宛原稿を返送する（この場合、森岡は第二の校閲者を選び、第二の校閲者の意見にしたがって原稿の採用・不採用を決める）、②内容が出版するに値すると考えられた場合は、必要に応じて字句の修正、表現の不適切な箇所の添削などを行い、原則として1か月以内に森岡に原稿を戻す。なお、この段階で編集委員は著者の考えを確かめることもある。
- 森岡： 英文部分（英文論文では和文要約以外の全部、日本語論文では英文表題、図表、英文要約）をBrazilに送る。
- Brazil： 英文を校閲し、森岡に原稿を戻す。
- 森岡： 校閲の終了した原稿をいったん著者に返却する。（日本語論文では、時間の節約のため、英文校閲の前に著者に原稿を返却することがある。）
- 著者： 編集幹事および編集委員の意見をよく検討し、最終原稿を作成する。なお、最終原稿は必ずしも全面的に清書をする必要はなく、必要な部分だけの書き直しや切り張りでもよい（要は印刷所が困らない程度に明瞭であること。あまりに汚い原稿は清書が必要である）。また、編集者側の意見に不賛成の場合、あるいは編集者の修正が原著の事実や意見を損なう場合は、著者は編集者の意見にしたがわなくてもよい（編集者側の誤解の場合もあるから、著者は不満の点についてはっきり意見を述べること）。著者と編集委員との意見の違いは編集幹事が調整し、編集幹事が調整できぬ場合は、編集幹事は第二の校閲者を指名して意見を聞く。
- 森岡： 著者から最終原稿を受取り、1号分の原稿をとりまとめて印刷所に渡す。

以上のように、書けばかなり複雑な手順を経るが、従来も必要に応じて編集幹事以外の者が原稿の校閲を行っていたので、まったく新しい態勢というわけではない。しかし、従来は必要に応じて第三者の校閲を受けていたのを、今回からすべての論文は第三者の校閲を受けることに改められた。

こうした査読制度は、海外の学会のほとんどが採用しており、国内の学会も大部分が採用している。また、日本学術会議の会員選出に伴う学会登録の資格条件（別項参照）のひとつにもなっている。査読制度はもともと原稿を落とすためのものではなく、論文の質の向上を図るた

めのものなので、投稿者はできるだけ編集委員を利用してもらいたい。著者1人では気づかぬ欠点は必ずあるものなので、印刷する前に第三者に原稿を見てもらうことは、著者にとって非常にプラスになると考えられる。

なお、短報については、時間的な節約も考えて、従来通り編集幹事2人と英文校閲者が校閲し、必要に応じて編集委員が校閲するものとする。論文の場合、編集委員も多忙なので、上記の校閲に最低3か月（編集委員1か月、英文校閲1か月、その他1か月）はみて欲しい。

新しい編集態勢になって、最初のうちは不行き届きな点や雑誌刊行の遅延もあろうかと思われるが、会員諸氏のご了解とご援助も得たい。（編集幹事）

日本学術会議の新会員選出制度に伴う学会登録

新聞紙上などでご承知のことと思うが、日本学術会議の会員選出制度が改正となり、従来は研究者個人が選挙人として登録され、選挙人による直接投票によって会員が選ばれていたが、今回からは学会が会員候補者を推薦し、また学会の選んだ推薦人が会員候補者の中から会員を推薦する制度に改められた。

これに伴って、会員の選出にかかわる学会は日本学術会議会員推薦管理会に登録することが定められ、登録学会となる条件として次の各項を満たすものとされた。

- ① 個人会員を主たる構成員とし、学術研究の向上発展を図ることを目的とする団体であること（法人でなくてもよいが、営利・親睦・政策等を目的とする団体ではないこと）。
- ② 設立後3か年以上の活動実績があること。
- ③ 理学関係（第4部）の場合、学生会員（大学院学生は含まない）、購読会員、団体会員以外の個人会員が300名以上あること（最低会員数は部によって異なる）。
- ④ 学術研究集会（大会）を年1回以上開催していること。
- ⑤ 学会誌を定期的に年1回以上刊行していること。
- ⑥ 学会誌には査読制度（またはそれに準ずる制度）があること。
- ⑦ 総会（もしくは理事会・評議員会等）を年1回以上開催していること。
- ⑧ 会員の資格が特定の地域または学校等に限定されていないこと（同窓会・各種校友クラブなどは登録できない）。
- ⑨ 学会の役員（本会の場合は会則の規定により会頭・副会頭・評議員・幹事・監事）の半数以上が大学等の研究機関に所属する科学者であること（これは、学会は科学者によって運営されるべきだという趣旨による）。
- ⑩ 経常収入の半分以上が個人会費であること。

日本鳥学会は、以上の資格を十分に満たす学会と考え、日本学術会議に登録学術研究団体の申請を行なった。登録申請にあたって、一部の評議員・幹事のなかには政府による学会規制を懸念する向きもあったが、将来の問題はともかく（この基準は将来変りうる）、上記の資格条件は学術会議側で審議されたものであり、また内外のほとんどの学会にとって当然すぎるほどの最低資格であろう。日本鳥学会は、日本の生物学関係の学会の中では歴史の古い方であるが、生物学プロバターの学会から見れば、アマチュア協会的な面が多いことも否定できない。上記の資格条件の中では、とくに⑥の査読制度と⑨の役員の資格の点では改革の余地があるかと思われる。ただし、査読制度に関しては、学術会議の登録問題が起る以前に、改革が決まっていた。⑨の役員の問題についても、研究機関に所属している者かアマチュアかの問題はさておき、少なくとも学会誌に論文を発表している人が評議員に選ばれるのが望ましい。とにかく、この登録を機会に、わが国唯一の鳥学の学会の名に名実ともに恥じない体制をつくる必要がある。（校正中に、学術会議から登録が認められた旨の通知があった。）（森岡弘之）

外国交換雑誌について

諸外国との交換雑誌を整理しました。コピーなどを必要なかたにはできるだけ便宜を計ります。御相談下さい。ただし、執筆者名、発表年、論文題目、雑誌名・巻・頁を必ず書いて下さい。コピー代は1枚30円、プラス送料実費、支払いは切手でもかまいません。申込みは学会事務局へ。

Acta Ornithologica (Poland)	1(1933-36)+
Alauda (France)*	26(1958)+ [33(1,2),40(1,3,4),41(1,2,3), 42(1-4),43(1)]
Aquila (Hungary)	55(1958)+
Ardea (Netherlands)*	49(1961)+ [53(1-4),58(1-4)]
Ardeola (Spain)	7(1961)+
Auk (U.S.A.)	71(1954)+ [74(3),79(4)]
Auspicium (W.Germany)	1(1959-62)+
Beitr. zur Vogelkunde (E.Germany)	21(1975)+ [22(1,2),26(2)]
Bird Banding (U.S.A.)	18(1947)-50(1979) [22(1,2),26(2)]
Bird Study (U.K.)*	1(1954)+ [many]
Bird Watcher's Digest (U.S.A.)	1(1978-79)+
Bokmakierie (South Africa)	27(1975)+ [27(1,2,4)]
Condor (U.S.A.)*	54(1952)+ [many]
Dansk Orn. For. Tidsskr. (Denmark)	52(1958)+ [52(1,2),53(1),56(1-3)]
Emu (Australia)*	53(1953)+ [54(1),56(2,4),57(1,2,4), 58(2),59(1-4)]
Gerfaut (Belgium)*	31(1941)-35,44(1954)-45,50(1960)+ [72(4)]
J. für Ornithologie (W.Germany)*	93(1952)+ [97(1-4),99(1-4),100(1-4), suppls.107,111,115]
Larus (Yugoslavia)*	3(1949)-20,25(1971),29(1976)+
Larus (English version)	1(1947)-2,21(1967)-24(1970)
Living Bird (U.S.A.)	14(1975)-19(1980)
Living Bird Quarterly (U.S.A.)	1(1982)+
Notornis (New Zealand)	1(1943-46)+
L'Oiseaux (France)*	31(1961)+ [33(1,2,5),34(5),35(3,4), 36(3,4),42(1),43(3),44(3)]
Ornis Fennica (Finland)	25(1948)+ [39(3)]
Ornithological Monographs (U.S.A.)	Nos.2,3,5,6,9-15
Orn. Beobachter (Switzerland)	46(1949)+ [49(2),56(3),59(2),67(3)]
Orn. Mitteilungen (W.Germany)	18(1966)+ [18(2,4,8,9),19(9),20(2), 22(1-3,5,10,11)23(2),24(11)]
Ornithologiya (U.S.S.R.)	5(1962)+ [6,8-9,10,12-13]
Ostrich (South Africa)	38(1967)+ [38(4),45(1,4),46(1,2)]
Pavo (India)	15(1977)+
Ring (Poland)	Nos.3(1955)+ [nos.17,25,34]
Rivista Italiana di Ornitologia (Italy)*	31(1961)+ [34(1,2),35(1-4),39(2), 50(4)]
Sterna (Norway)	1(1951-56)+
Strix (Japan)	1(1982)+
Tori (Japan)	1(1915)+ [nos.40,57,81]
Var Fagelvärld (Sweden)	20(1961)+ [suppls.5-8]
Vogelwarte (W.Germany)	17(1954)+ [17(2)]
Vogelwelt (W.Germany)	75(1954)-88(1967) [81(1),84(3), 85(1),88(3-6)]

Wildfowl (U.K.)	Nos. 2(1948-49)+ [nos. 25, 28]
Wilson Bulletin (U.S.A.)	62(1950)+ [63(1, 3, 4)]
Wingtips (U.S.A.)	1(1984)+
World Pheasant Ass. Journal (U.K.)	1(1975-76)+
Yacho (Japan)	31(1966)+ [31(5), 33(3, 5, 7-9), 34(7)]
J. Yamashina Inst. Orn. (Japan)	9(1977)+
Zprávy MOS (Czechoslovakia)	33(1975)+

注) 雑誌名(発行国名) 巻(年) +: 継続 [: 以下は欠号を示す. 巻(号)

#: 未整理, 新規購入によって補う予定 S: Supplement, Sonderheft

*: 山階鳥類研究所との間で整理がすんでいない雑誌で欠号が多い

Meeting

鳥学会例会 1984年3月17日(土)14~16
時30分 東京大学農学部

<講演1> キツツキ類の食性 糞分析から
(松岡茂, 小嶋研二氏)

松岡さんと小嶋さんは、北海道大の動物学研究室でキツツキ類の研究をされた。お二人の研究の間には数年の空白があるが、テーマは食性から見た北海道産キツツキ間の種間競争であり、関連の論文などを『鳥』などで読まれた会員諸士は多いはずである。直接観察によると、採食法も種によって大きな違いがあり、クマガラは幹を強打して大きな穴をあける、ヤマゲラはつたや樹皮のはがれた場所をさぐる、オオアカゲラは主にヤマモミジを強打して穴をあけるが、雄は太い木の地面近くを、雌は梢の細い枝で採食する、アカゲラは特徴がなく様々な場でつつく、コゲラ雄は太い枝で、雌は幹の下の方または地上で採食、と各種雌雄間で違うという。また、鳥を追跡して糞を採取し、内容を分析すると、クマガラはほとんどムネアカオオアリ(ただし夏はトビイロケアリ)を、ヤマゲラは主にトビイロケアリ(冬期積雪が多いとクマガラの食痕

でムネアカオオアリ)を、オオアカゲラはカミキリ幼虫、クイムシのほか秋冬にはウルシの実を、アカゲラは採食法が特殊化されていないことを反映して、多様なものを食べていたという。コゲラの糞はなぜか分析困難だったようだ。一部にややデータ不足の感を覚えましたが、仲々見事な結論が出たことに感心した。

<講演2> アカゲラの食性(石田健氏)

山梨県山中湖畔の東京大演習林で、主に育雛のための給餌の記録について、スライド多数を見ながらの解説であった。実に様々なものを運んでくることに驚き、講演1の話とも相まって、日本産では最も“キツツキらしくないキツツキ”アカゲラの感を深くした。

(竹下信雄)

日本鳥学会の入会案内(しおり)が
できました。鳥に興味をもっている人
に入会をすすめるのに活用して下さい。
入用のかたは学会事務局に申込んで下
さい。

例会のお知らせ

— 本誌を見せて動物園へはお入りください —

① 1985年1月12日(土) 午後2時開演～4時ごろまで。

〈'84大会講演会から〉

講演：イソシギの社会 — ディスプレイをめぐる。中村登流氏(上越教育大学)
ネズミを喰うフクロウ類。西村欣也氏・上原京氏(筑波大学)

会場：東京大学農学部3号館2階326教室(東京都文京区弥生1丁目)

② 1985年2月23日(土) 午後2時開演～4時ごろまで。

〈鳥のおもしろい行動〉

講演：ササゴイの採食行動。樋口広芳氏(東京大学)
オナガのおもしろい行動。石川万紀子氏(筑波大学)

会場：上野動物園・動物園ホール(東京都台東区上野公園)

※ 短報……いずれの例会でも、講演終了後の短報を歓迎します。

※ やむをえず講演の変更や中止をする場合があります。参加希望される方は、例会開催日の前々日から当日の昼間まで、テレホンサービスをしていますので利用して下さい。

電話番号 0484-62-7141

〈会合幹事から〉

東京近郊や上京する機会のある方で、例会で話してみたい、あるいはあの人の話が聴きたいとおられる方がありましたら、例会幹事まで御一報下さい。また例会では、当日でも短報を受け付けています。ちょっとした観察報告、鳥学関係の動向などありましたら気軽にお申し出下さい。通常、スライドプロジェクターは用意してありますので写真も歓迎します。

〈次号予告 特集 調査・観察の小道具(2)〉

今回の特集にひきつづき、計測器やフィールド・ノート、筆記具、テント、装備などについて、経験にもとづいたカタログをつくりたいと思います。使っていて便利なものを是非とも紹介して下さい。400字詰原稿用紙1枚程度にまとめ、できれば写真や図をそえて下さい。2月末日までにニュース編集部へ。

〈前号訂正〉

№14 p.10中〈幹事の分担変更〉中、庶務の吉井氏は誤りでしたので削除します。

ニュース編集部

〒112 東京都文京区大塚5-40-10 日本大学豊山高校 川内博宛

編集後記

今年の三重での大会は、務めの関係で残念ながら出席できませんでしたが、シンポジウムでは、このニュースレターが好評のうちに迎えられているとのこと、心強く思っています。

新コーナーへのご投稿お待ちしております。末尾ながらご執筆者へ感謝します。(川内)

鳥学ニュース No. 15

1984年12月1日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館分館内 (電話) 03(364)2311 (振替) 東京1-6599

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博

印刷所 文英社印刷